

二年生の卒業までの団であってほしい!

三年C組の朝の会を参観しました。その中で、担任のN教諭が生徒たちに投げかけました。

「今日は一年生のバレーボール大会だけど、同じ団としてのように応援する?一年生がバレーボールをやっている時には、君たちには授業があるし……。」

体育大会の代替大会として計画されたバレーボール大会は学年ごとに行います。したがって、体育大会のように、同じ時に、同じ場所で声援を送り合うことができません。それは事前にわかっているとしても、生徒たちは団を組むことを選択しました。いつ、どのように団としての意識を発揮するのか、それが当然難しくなります。

コロナ禍の状況の中、今年度に関しては、団も団リーダーも要らない、事前取り組みも要らない、レクとしてのバレーボールができればよい、と考えていたのです。

しかし、生徒の意識は違っていました。体育大会はできなくても、団としての意識を強くし、団として取り組みたいと考えたのです。生徒がそこまで団という組織に強い思いをもっていることを改めて知りました。結局、バレーボール大会であっても、全校が一堂に会する大会でなくても、団を意識して取り組むことになりました。

昨日までは、日常生活において団の関わりを生み出してきました。後輩たちの生活の様子に気を配る三年生。縦のつながりを作りたいと後輩たちに積極的にエールやアドバイスを送る団リーダー。そんな姿を見ると、生徒たちが団という組織にこだわる理由がわかる気がします。

先輩と後輩という厳格な区別があるように見えますが、それは伝える者と伝えられる者の関係です。その関係において伝統は生き続けます。職場での人間関係と同じです。異年齢の者同士が関わり合って大切な技術や製法が伝わるのです。

私は生徒たちに更に期待します。バレーボール大会だけの団ではなく、三年生が卒業するまでの団であってほしい。そう考えています。

身の回りの整理整頓、充実した授業づくり、主体的な家庭学習の確立、衛生的で能率的な配膳、集中した掃除……先輩から後輩へと受け継がれるべきものはたくさんあるはず。先輩の存在価値というのは、部活動と体育大会(今年度はバレーボール大会)だけで決まるものではないはずですから。

(九月八日 記)

